

資料

幼児の愛他行動に及ぼす理由づけの効果

首 藤 敏 元*

EFFECTS OF REASONINGS ON ALTRUISTIC BEHAVIOR IN PRESCHOOL CHILDREN

Toshimoto SHUTO

This study examined the effects of the type of reasoning on the consequences for sharing on preschoolers' motivations to altruistic behavior. Thirty preschool children watched a videotape of a victim who appealed the damages of disaster. Subsequently, children received either an other-oriented rationale stating that sharing might bring any victim positive consequences, a self-oriented rationale explaining that sharing might bring themselves positive consequences, or a procedure of sharing without any explanation. Children were then given the opportunity to share a token in the presence and in the absence of an adult. The rate of sharing in the condition of a self-oriented reasoning decreased significantly in an adult presence and in his absence. Other-oriented reasoning elicited a greater rate and a more stable pattern of sharing than the other two conditions. The present finding suggested that other-oriented reasoning motivated an altruistic behavior while self-oriented reasoning motivated an egoistic behavior in preschool children.

Key words : discipline, other-oriented reasoning, altruism, sharing behavior, preschool children.

問題と目的

愛他行動を規定する要因には様々なものが指摘されている (Mussen & Eisenberg-Berg, 1977 ; 高野, 1982)。特に, 親の養育態度の1つであるしつけのタイプは, 特定の状況における愛他行動の動機づけだけでなく, 長期に亘って愛他行動の社会化に影響すると考えられる。Hoffman (1977) によると, しつけのタイプは次のように分類することができる。即ち, 子どもの行動を統制するために, 賞罰を利用する力中心の (power assertive) しつけ, 子どもの行動が他者に与える影響を説明したり, 説得したりする誘導的 (inductive) しつけ, および子どもを無視したり, 要求に応えなかったりする愛情の除去 (love withdrawal) である。そして, 愛情の除去と愛他行動の関連は仮定されていないものの, 誘導的しつけは愛他行動の社会化を促進させ, 力中心のしつけはそれを抑制することが示唆されている。

しつけの言語的側面は理由づけ (reasoning) と呼ばれている。Kuczynski (1982, 1983) は子どもの誘惑への抵抗行動を動機づける理由づけの効果について研究し, 理由づけの効果はその方向に規定されることを指摘した。つまり, 彼は理由づけを子どもの行動が子ども自身に及ぼす影響を説明してやる自己志向的理由づけ (self-oriented reasoning) と子どもの行動が他者に及ぼす影響を説明してやる他者志向的理由づけ (other-oriented reasoning) に分け, 後者が逸脱行動を抑制することを見出している。Kuczynski の他者志向的理由づけと自己志向的理由づけは, それぞれ Hoffman の誘導的しつけと力中心のしつけの言語的側面を扱ったものとみなすことができる。従って, 他者志向的理由づけが子どもの誘惑への抵抗行動を動機づけるという, 従来から逸脱行動を中心に見出されてきた理由づけの方向の効果は, より積極的な社会行動である愛他行動の動機づけにも適用されるかもしれない。

愛他行動の社会化としつけの関係を検討した研究 (Dulgovinski & Firestone, 1974 ; Hoffman, 1975) は

* 筑波大学 (University of Tsukuba)

誘導的しつけと愛他行動の間に有意な正の相関を見出している。しかしながら、これらの研究では実際の行動は測定されておらず、また相関研究である。そのため、誘導的しつけが愛他行動を動機づけるか否か結論することはできない。また、Israel と Brown (1979), Perry, Bussey と Freiberg (1981) は理由づけのタイプが子どもの分与行動に及ぼす効果を実験的に検討しようとした。しかし、彼らは大人が要求した分与に子どもがどの程度従うかという従順さを指標としており、自発的な分与行動は測定されていない。菊池 (1983) も指摘している通り、自発性は愛他行動の重要な特徴の1つである。

そこで、本研究は分与行動を取り上げ、幼児の愛他行動の動機づけに及ぼす理由づけの方向の効果を実験的に検討することを目的とした。理由づけの条件として、分与は犠牲者の快感情を引き起こすことを説明する他者志向的理由づけ条件と、分与は分与者自身の快感情をもたらすことを説明する自己志向的理由づけ条件、および分与の結果について何も説明されないコントロール条件が用いられた。また、分与行動が愛他的か否か検討するために、分与者に外的強化をもたらすと考えられる大人の在・不在要因が加えられた。愛他行動は犠牲者の苦痛の低減を目標に動機づけられる行動であるため、外的要因には影響されないと考えられる (Batson, Duncan, Ackerman, Buckley, and Birch, 1981)。従って、分与が愛他的な動機によるならば、その分与は大人の在・不在状況に影響されないであろう。一方、分与が具体的報酬や社会的承認の回避の動機などによって行われているならば、その分与は大人の在・不在状況に影響されるであろう。

具体的には次の仮説が検討された。

(1) 大人の存在する場面においては、他者志向的理由づけと自己志向的理由づけを与えられた被験者は理由づけを与えられないコントロール条件の被験者よりも多く分与するだろう。一方、大人不在の場面では、他者志向的理由づけ条件の被験者は自己志向的理由づけ条件とコントロール条件の被験者よりも多く分与するだろう。

(2) 他者志向的理由づけを与えられた被験者の分与行動は大人の在・不在状況に影響されないであろう。一方、自己志向的理由づけを与えられた被験者は大人不在の状況よりも大人の存在する状況において多く分与するだろう。

方 法

被験者と実験計画 茨城県内の幼稚園年長組の園児30名(男女15名ずつ)が被験者として実験に協力した。実

験計画は3(理由づけ) × 2(大人の在・不在)の要因計画が用いられた。第1の要因は被験者間、第2の要因は被験者内要因である。被験者は他者志向的理由づけ条件、自己志向的理由づけ条件、とコントロール条件に男女5名ずつランダムに配置された。

犠牲者 実験に先立ち、犠牲者として呈示される子どもの演技が作成された。演技者として東京都内のA劇団の子役が用いられた。演技は天災による困窮状態について約1分程度訴えるものであり、演技者の上半身がカラーのVTRに録画された。小学4年生を対象にしたパイロット・スタディの結果から、訴えの困窮状態の程度に有意差の見られなかった小学3年生の男子と小学2年生の女子の演技が本実験材料として用いられた。

手続 実験は個別に実施された。被験者の前にはTVとVTR、ゲーム用紙と被験者用の分与箱が準備されていた。被験者は実験者がゲームを開発している大人であり、子どもがいかに上手にゲームを遂行できるかに興味があると説明された。そして、これから行われるゲームについて説明を受けた。ゲームとして用いられたのは、“点つなぎゲーム”と命名され、縦横6cmの紙に3個から10個の点が印刷されており、その点を全て通る線を描くという単純なものであった。実験者はゲームを示範してみせた後、このゲームを多く完成させるほど、後でいっそうすばらしい賞品と交換できると教示した。賞品の魅力度を一定にするため、具体的な賞品名は告げられなかった。被験者は実験者が見ている前で1分間ゲームを行った。

次に犠牲者が呈示された。被験者は知ってほしい子どもがいると言われ、その子どもの話を聞くために、TVを視聴するよう教示された。TVとVTRのスイッチがonにされた後、被験者は実験者と一緒に犠牲者の訴えを視聴した。

この後、被験者はもう1度ゲームができると言われ、正面に犠牲者用の分与箱が用意された。そして、ゲームを完成させるごとに、ゲーム用紙を2つの箱のどちらにも入れることができると説明された。更に、ゲーム用紙を被験者の箱にたくさん入れるほど、被験者は前よりもいっそうすばらしい賞品を獲得できると教示された。一方、犠牲者の箱に入れた場合、犠牲者のゲーム用紙が増えるほど犠牲者にすばらしいプレゼントを送ることができると教示された。この後、理由づけ条件が操作された。

1. 他者志向的理由づけ条件 分与後の犠牲者の快が教示された。具体的には、“この子は色紙もクレヨンもなく遊ぶことができません。何もなくて、とても困っ

ています。だから、この子はプレゼントをもらうととても喜びます。プレゼントでとても楽しく遊ぶこともできます。〇〇（被験者の名前）がこの子にプレゼントをあげたいと思ったら、終わったゲームをこの子の箱にも入れてあげてください。あげたくなければ入れなくてもよいです。”

2. 自己志向的理由づけ条件 分与後の社会的承認が教示された。具体的には、“この子は色紙もクレヨンもなく遊ぶことができません。何もなくて、とても困っています。この子はプレゼントをもらうと、とても助かります。困っている人を助けると先生からほめてもらえます。お友達の前でほめてもらえるでしょう。〇〇（被験者の名前）がこの子にプレゼントをあげたいと思ったら、終わったゲームをこの子の箱にも入れてあげてください。あげたくなければ入れなくてもよいです。”

3. コントロール条件 分与の結果、犠牲者もプレゼントをもらえるということ以外、何も教示されなかった。“この子は色紙もクレヨンもなく遊ぶことができません。何もなくて、とても困っています。〇〇（被験者の名前）がこの子にプレゼントをあげたいと思ったら、終わったゲームをこの子の箱にも入れてあげてください。あげたくなければ入れなくてもよいです。”

この後、被験者は実験者の存在している場面（大人—存在条件）と不在の場面（大人—不在条件）の両方で分与を行った。まず、被験者は実験者が見ている前で3分間ゲームを行い、ゲームが完成するたびに分与を決定し、実行した。この時、実験者は被験者が何枚ゲームを完成させ、そのうち何枚分与するかを記録した。次に、実験者は職員室へ行く用事があるという口実により、3分間退室した。その間被験者はゲームを続けることが許され、同様にゲームが完成するたびに分与を決定し、実行した。

実験者の入室後、被験者はゲームを中止した。実験者は被験者用の箱に入れられたゲーム用紙を数え、被験者の名前の書かれた封筒に入れ、被験者と賞品を約束した。封筒は被験者が教室に持って帰らないように配慮された。1週間後、被験者は担任の教師からミッキーマウス絵入りのおり紙をプレゼントされた。

結 果

分与率に関する分析 大人の在・不在場面のそれぞれにおいて、（分与されたゲーム用紙の枚数／完成されたゲーム数）× 100の式により、分与率が計算された。この分与率に関して分散分析が行われる前に、繰り返しのある分散分析（ANOVA with repeated measures）

の前提条件である分散および共分散の等質性の検定が行われた（Winer, 1971）。BOX の方法による検定の結果、3つの理由づけ条件の共分散行列は互いに等しく（ $\chi^2 = 2.04$, $df = 6$ ）、また3つの条件それぞれにおける2つの分散は等しかった（ $\chi^2 = 0.54$, $df = 1$ ）。従って、分散・共分散の等質性という前提条件は満たされているといえる。

3（理由づけ）× 2（大人の在・不在）の1要因（大人の在・不在）に繰り返しのある分散分析の結果、理由づけの主効果が1%水準で有意であった（ $F = 6.50$, $df = 2/27$ ）。Tukey 法による多重比較の結果、他者志向的理由づけ条件の分与率（ $M = 55.32$ ）は自己志向的理由づけ条件の分与率（ $M = 31.26$ ）よりも5%水準で有意に高く、コントロール条件の分与率（ $M = 22.40$ ）よりも1%水準で有意に高かった。自己志向的理由づけ条件とコントロール条件の分与率には有意差は認められなかった。

また、理由づけと大人の在・不在の交互作用が有意になる傾向にあった。（ $F = 3.07$, $df = 2/27$, $P < .07$ ）。仮説検討のため、この結果は更に分析された。FIG. 1 はこの交互作用をプロットしたものである。大人の存在場面と不在場面の両方において、理由づけの単純主効果は有意であった（それぞれ、 $F = 2.93$, $P < .05$, と $F = 8.58$, $P < .05$, いずれも $df = 2/54$ ）。多重比較の結果、大人の存在場面においては、他者志向的理由づけ条件の

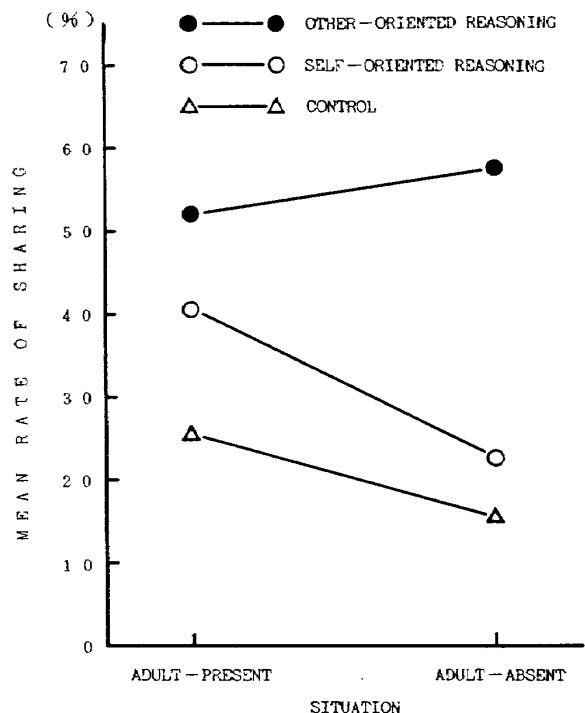


FIG. 1 Mean rate of sharing as a function of type of reasoning and adult-present and absent situations.

TABLE 1 Number of subjects sharing self-sacrificially under adult-present and absent situations in each of reasoning conditions

situations	reasoning conditions			χ^2 ^a
	other-oriented	self-oriented	control	
adult-present	7	7	3	4.34
adult-absent	6	1	1	8.52
McNemar's χ^2 ^b	0.00	4.17	0.25	

a df=2

b df=1, The values of chi-square are adjusted for continuity.

c $p < .05$

分与率はコントロール条件の分与率よりも有意に高く ($P < .05$), 他者志向的理由づけ条件と自己志向的理由づけ条件, および自己志向的理由づけ条件とコントロール条件の間には有意な差は見られなかった。大人の不在場面においては, 他者志向的理由づけ条件の分与率は自己志向的理由づけ条件とコントロール条件の分与率よりも有意に高く ($P < .01$), 自己志向的理由づけ条件とコントロール条件の分与率には有意差は見られなかった。また, 自己志向的理由づけ条件においてのみ, 大人の在・不在の単純主効果が有意であった ($F = 6.45$, $df = 1/27$, $P < .05$)。つまり, 自己志向的理由づけ条件の分与率は大人の存在場面から不在場面にかけて有意に減少していた。

自己犠牲的分与者数の分析 大人の在・不在場面のそれぞれにおいて, 自分よりも犠牲者に多く分与した者を自己犠牲的分与者とした。自己犠牲的分与者数に関して, 大人の存在場面と不在場面ごとに理由づけ条件間の差をみるために χ^2 検定が用いられた。また, 理由づけ条件ごとに大人の在・不在場面の差が McNemar の方法により検定された。これらは結果は TABLE 1 に示している。大人の不在場面において, 他者志向的理由づけ条件には他の2つの条件よりも自己犠牲的に分与した者が多くいた。更に, 自己志向的理由づけ条件では, 大人の存在場面から不在場面にかけて, 自己犠牲的に分与した者が7人から1人に有意に減少していた。

考 察

他者志向的理由づけ条件の分与率は大人の在・不在に関係なく, 他の2つの理由づけ条件の分与率よりも高く, かつ安定していた。一方, 自己志向的理由づけ条件の分与率は大人の存在場面から不在場面にかけて大きく減少していた。これと同様の結果が自己犠牲的分与者数

に関しても得られた。これらの結果は仮説2を支持するものである。また, 自己志向的理由づけ条件の分与率は, 大人の存在場面においては他者志向的理由づけ条件のそれと有意に異なっておらず, 大人の不在場面においてはそれより有意に低く, コントロール条件の分与率と同程度であった。大人の存在場面における自己志向的理由づけ条件とコントロール条件の分与率に有意差が見られなかったことを除けば, これらの結果は仮説1を支持している。自己犠牲的分与者数の結果も仮説1と一致する方向にあった。以上の結果から, 他者志向的理由づけは大人の在・不在という外的要因に影響されることなく, 犠牲者の幸福を目標にした, 即ち愛他的な分与行動を動機づけることが示唆される。一方, 自己志向的理由づけは大人の存在によって期待される具体的報酬や社会的承認の獲得, あるいは罰や社会的否認の回避を目標にした, つまり利己的な分与行動を動機づけることが示唆される。

本研究は大人の在・不在要因の操作を, 大人の存在場面から不在場面という一方向のみに限定し, 存在場面と不在場面の順序効果については検討しなかった。他者志向的理由づけが愛他行動を動機づけるならば, 本研究とは逆の大人の不在場面から存在場面へと状況が変化しても, その分与率は高く, 安定していることが予想される。また, 自己志向的理由づけが利己的行動を動機づけるならば, 分与率は大人の不在場面から存在場面にかけて増加するであろう。今後, 大人の不在場面から存在場面に操作しても, 本研究の結果が追認されるか否か検討する必要がある。更に, コストの高低のような大人の在・不在要因以外の状況要因を用いても, 本研究の知見が妥当であるか否か検討していく必要があるだろう。

本研究結果により, 自己に向けられたものか, あるいは他者に向けられたものかという理由づけの方向の効果は, 誘惑への抵抗行動だけでなく愛他行動にも適用されることが示された。では, なぜ他者志向的理由づけは愛他行動を動機づけ, 自己志向的理由づけは利己的行動を動機づけるのであろうか。Hoffman (1977) は誘導的しつけが愛他行動の社会化を促進する根拠として, 共感の機能を重視している。つまり, 誘導的しつけは子どもの注意を他者に向けさせ, 外的状況への注意と自己への関心を最小にし, 他者の苦痛に対する子どもの自然な内的情緒, 即ち共感に基づいた内発的な動機づけを引き起こす。一方, 力中心のしつけは子どもの注意を理由づけを与える大人に向けさせ, 大人の罰や賞賛に敏感にさせる。その結果, 罰の恐れに基づいた外発的な動機づけをもたらす。このような誘導的しつけと力中心のしつけの効果は, その言語的側面である理由づけの効果としても

適用されうると思われる。

誘導的しつけと愛他行動の間のメカニズムに関して、誘導的しつけによって役割取得と共感が促されるのか、共感と愛他行動を誘導的しつけが媒介するのかが問題になる。本研究は共感を測定していないため、他者志向的理由づけ条件の被験者がどちらのプロセスに沿って行動したかは不明である。しかし、従来からの研究では犠牲者が仮説上の人物あるいは実験者自身として呈示されており、被験者が理由づけを与えられる前に共感する可能性は小さいと思われる。一方、本研究では犠牲者として実際の子どもがTVを通して苦境状況を訴えた。この直接的な訴えを目撃した被験者は理由づけの前に犠牲者の苦痛に共感していたことが十分考えられる。このように、他者志向的理由づけの効果は誘惑への抵抗行動と愛他行動の両方に適用されうもの、そのメカニズムは単一ではないのかもしれない。この点に関して、更に研究を進める必要がある。

しつけには長期と短期の2つの目標があることが指摘されている (Sawin & Parke, 1980)。長期の目標は道徳的価値の内面化を促進し、自己統制能力を育てることである。短期の目標はある時期、ある場所で子どもの行動を統制することである。本研究は子どもの愛他行動に及ぼす理由づけの短期的な効果を実証したといえる。更に、親の誘導的しつけと役割取得 (山岸, 1980) や愛他行動 (Dulgokinski & Firestone, 1974; Hoffman, 1975) に有意な正の相関を見出した研究は、他者志向的理由づけが子どもの愛他行動の発達において長期的な効果をも持っていることを示唆している。今後、愛他行動の社会化における他者志向的理由づけの長期的および短期的効果のメカニズムを、子どもの共感能力と関連させながら検討を加えていく必要がある。

引用文献

- Batson, C. D., Duncan, B. D., Ackerman, P., Buckley, T., and Birch, K. 1981 Is empathic emotion a source of altruistic motivation? *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 290-302.
- Dlugokinski, E. L., and Firestone, I. J. 1974 Other centeredness and susceptibility to charitable appeals: Effects of perceived discipline. *Developmental Psychology*, 10, 2-28.
- Hoffman, M. L. 1975 Altruistic behavior and parent-child relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 937-943.
- Hoffman, M. L. 1977 Moral internalization: Current theory and research. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 10). New York: Academic Press.
- Israel, A. C., and Brown, M. S. 1979 Effects of directiveness of instructions and surveillance on the production and persistence of children's donations. *Journal of Experimental Child Psychology*, 27, 250-261.
- 菊池章夫 1983 向社会的行動 三宅和夫・村井潤一・波多野誼余夫・高橋恵子 (編) 波多野・依田 児童心理学ハンドブック 金子書房 Pp. 716-718.
- Kuczynski, L. 1982 Intensity and orientation of reasoning: Motivational determinants of children's compliance to verbal rationales. *Journal of Experimental Child Psychology*, 34, 357-370.
- Kuczynski, L. 1983 Reasoning, prohibitions, and motivations for compliance. *Developmental Psychology*, 19, 126-134.
- Mussen, P., and Eisenberg, N. 1977 *Roots of Caring, Sharing, and Helping: The Development of Prosocial Behavior in Children*. San Francisco: Freeman. 菊池章夫 (訳) 1980 思いやりの発達心理 金子書房
- Perry, D. G., Bussey, K., and Freiberg, K. 1981 Impact of adults' appeals for sharing on the development of altruistic dispositions in children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 32, 127-138.
- Sawin, D. B., and Parke, R. D. 1980 Empathy and fear as mediators of resistance-to-deviation in children. *Merrill Palmer Quarterly*, 26, 123-133.
- 高野清純 1982 愛他心の発達心理学: 思いやりと共感を育てる 金子書房
- Winer, B. J. 1971 *Statistical principles in experimental design*. Holt, Rinehart and Winston. pp. 594-599.
- 山岸明子 1980 役割取得能力の発達に影響する社会的経験の検討: "役割取得の機会" の観点からの分析心理学研究, 52, 289-295.
- 付記 本研究の実施および本論文の作成にあたり、終始御指導してくださいました筑波大学心理学系教授 高野清純先生、杉原一昭先生に感謝致します。また、実験を心よく引き受けてくださいました幼稚園の先生、そして被験者の皆様に感謝の意を表します。

(1985年3月29日受稿)